

鳥取県伯耆西部方言におけるラ行音節の隠在現象

室 山 敏 昭

はじめに

藤原サ一先生の御教示によれば(注一)、〔ハ〕子音のよわまりまたは脱落の現象は、山陰の出雲地方にいちじるしく、そのいちじるしさに比すべくもないが、北陸すじにも、やはり、同種同類のものがみとめられる、とのことである。

本論文では、その〔ハ〕子音のよわまりの現象が、出雲地方に隣る鳥取県伯耆西部地方に、どのようにみとめられるかを、記述してみようと思う。

ここで(筆者は)、〔ハ〕子音のよわまりの現象を、仮に、「ラ行音節の隠在現象」と呼ぶことにする。「ラ行音節の隠在」というのは、次のような意味である。共通語などで「アリマス」と言うところを、当該方言では「アーマス」と実現する。「アー」の長音部に、〔ハ〕のしずんでいる姿が思われる。「アマス」と実現するならば、「アハ」の脱落ということが言いやすい。しかし、「アーマス」と実現するからには、「アー」の長音部に、注目しなければならぬ。「アーマス」の「アー」について、これを音節的に微視すれば、

ば、「アー」は単純な〔a:]ではなく、〔a:]の口がまえにひかれ、〔a:]と実現するようである。〔a:]は顕在してはいないが、長音の音相下に、そのしずんでいる姿がうかがわれる。このように、「アーマス」の「アー」という長音の音相形態に、〔ハ〕が反省的に意識される場合を指して、〔ハ〕が隠在している、と呼ぼうと思う。以下、他の場合についても同様である。「ラ行音節の隠在」は、あくまで、共時論的呼称である。

この「ラ行音節の隠在」現象は、伯耆西部全域に認められるのであるが、岡山県に近い日野郡伯耆町、東伯耆に隣接する西伯郡中山町などでは、いくらかふるわぬと言えよう。伯耆東部、因幡においては、ほとんどみとめられないようである(注二)。この現象は、伯耆西部方言の、鳥取県地方における独自性を、かなり色こく醸成する一主要要素となっている、とすることができよう。

なお、この現象は、老年層から少年層にまで広くみとめられ、年齢によるかたよりは、ほとんどみとめられないようである。

一、ラ行音節が隠在している場合

(A) ラ行音節の隠在現象とその前節母音との関係

(一) /ra/音節の場合

(1)、「[a:]」につづく場合

○ガエニ クライ ウチニワ アガーシマヘダッタ ナー。大層
暗いうちには(大山には)登りませんでしたねえ。(老男↓
私)△西伯郡淀江町西原▽

○コーカー エーガ イク カー。これから映画を観に行くの。

(青男↓青男)△西原▽

これらは、共通語などでは、一般に、「アガー」は「アガラ」、
「コーカー」は「コレカラ」というように、実現されるところであ
る。それが、当該方言では「ra」が隠在して「a:」となっている。

○アリヤ アターシー モンデ アーマス ナー。あれは新しい
ものですねえ。(老男↓私)△西伯郡大山町所子▽

○ウン。アリヤー アターアシニ ツイタ モンダケー。うん。

あれは新しく設置されたものだから。(老男↓私)△所子▽
以上の二例も、「[a:]」に後接しているものである。この場合、
「アターアシニ」は、単純に「アターシニ」となっていないだけ
に、「ー」音の隠在が思われやすい。「アターアシニ」の形を經
て、「アターシニ」の形が成ったとも考えられよう。

「re」音節の隠在現象がみとめられるのは、その前接母音が「[e]」
である場合だけに限られるようである。

(二) /re/音節の場合

(1)、「[o:]」につづく場合

○イマゴーノ ヨーニ フク キル コトワ アーマシエダッタ
ダケ ナー。今頃のように服を着ることはありませんでしたか

らねえ。(老男↓私)△西伯郡岸本町岸本▽

○コノゴー アイツ サケガ エレ ヅエー ナー。この頃あい
つは酒が大層強いねえ。(中男↓中男)△米子市米子▽

以上は、「ー」音節の「re」が隠在して、「[o:]」となっているも
のである。「re」音節の隠在現象は、「今頃」「この頃」などの
「頃」に、収約的にみとめられると言うことができよう。「re」音
節の隠在現象がみとめられるのは、前接母音が「[o:]」である場合に
限られているようである。

(三) /re/音節の場合

(1)、「[a:]」につづく場合

○ガラン ガラン イシガ ナガーマシテ ナー。がらんがらん
(音をたてて)石が流れましてねえ。(老男↓私)△所子▽

○イマ ダーガ ヤッチョー ダイ。今(青年団長を)誰がして
いるの。(老男↓青男)△西伯郡中山町下市▽

これらは、「are」の「re」が隠在して、「[a:]」となっている事
例である。代名詞「ダー」以外に、「アレ」も、やはり「アー」と
実現することが多い。

○コーガ エーカ アーガ エーカ ヨー ワカーマシエンワ。

これが良いかあれが良いかよく分かりませんよ。(老男↓私)
△西伯郡名和町名和▽

(2)、「[o:]」につづく場合

○コーマデ ニドカサンド アーマス ワイ。これまで二、三度
ありますよ。(老男↓私)△岸本▽

○ソーデ ツナイデ オキナハイッテ。それでつないでおきな
き
いて。(老女↓少女)△西伯郡中山町岡▽

右のごとき事物代名詞は、多くの場合、*ra* が隠在して、「コー」「ソー」と実現されるようである。

(四) *ra* 音節の場合

(1) *ra* につづく場合

○イマワ ソゲナ ケブリワ アーマシエン ワ。現在はそんな様子はありませんよ。(老男↓私) △岸本▽

○ソゲナ コトガ アーマス カナ。そんなことがありますかね。

(中男↓私) △米子市富益新田▽

○イマワ マー ジョータクニ ナーシテ ナー。この頃はまあ(生活が全般に)せいいたくになりましてねえ。(老女↓私) △西伯郡名和町御来屋▽

「ナリ」の発音は、「生る」の意義の場合も「為る」の意義の場合も、ともに、*na:* と実現される。

○ツキアカリデ ヤーマスタケン ナー。(盆踊りは)月の明りでやりますからねえ。(老男↓私) △夜見新田▽

○エズモドリガ ハヤーマス ワイ。出雲踊りが盛んですよ。(老男↓私) △夜見新田▽

○ナンボ カンガエテモ ワカーマシエンダケ ナー。いくら考えても分かりませんからねえ。(老男↓私) △所子▽

○アツコツツ ヨー マワーシタ ナー。あつちこつち度々旅をしてまわりましたねえ。(老女↓私) △西伯郡大山町別所▽

○イマ コーチョー シトーナ ハーマス ナー。今校長をしておられますねえ。(青女↓私) △西原▽

以上の諸例は、共通語などでは、一般に、*ra* と実現すると

ころである。当地方では、*ra* が隠在して、*ra:* と実現される。*ra* 音節の隠在現象は、その前接母音が、*ra*、*o* である場合に、ことに盛んなようである。

(2) *o* につづく場合

○ボンオドーワ ナー。盆踊りはねえ。(老男↓私) △夜見新田▽

○チョッココー アガッタ コトワ アーマシエン ナー。こことしばらく(大山には)登ったことはありませんねえ。(老男↓私) △西原▽

○ウチノ ムシコワ ナゲ コト ガイコクニ イキチョーマスガ。私の息子は長年外国に行っていますよ。(老女↓私) △所子▽

以上の諸例は、母音 *o* につづく場合に見られるものである。*o:* の *ra* が隠在して、*o:* となっている。

(3) *e* につづく場合

○アトガエー スীগ エー ダ。あともどりする方がいいよ。(老女↓青女) △西原▽

(4) *ri* につづく場合

○ソゲナ コトワ シーマシエン ワ。そんなことは知りませんよ。(老女↓私) △夜見新田▽

ri が母音 *e*、*i* に後接する場合にみとめられる隠在現象は、比較的、ふるわないようである。

(5) *ri* につづく場合

○ニゲナ モノオ アメリカサンワ ヨー カブーマス ナー。

こんなものをアメリカ人はよくまあ好みますねえ。(老女↓私) △西原▽

○マエワ ツクーマシヨータドモ ナー。以前は作りましたけどねえ。(老女↓私) △御来屋▽

○ナワズンジャンノ マツイーワ ゴガツノ ナスカニ アーマスガ

ヤー。名神社の祭りは五月七日にありますかねえ。(老女↓私) △御来屋▽

「i」音節の隠在現象は、母音「i」につづく場合にもおこっている。かなりよく、みとめられるようである。

「i」音節は、その前接母音が、「a」、「o」、「e」、「i」、「e」のいずれであっても、隠在する可能性を有していると言えよう。

例、/ru/ 音節の場合

(1)、[a]につづく場合

○オメーノ ホンワ ココニ アーヨ。お前の本はここにあるよ。(青男↓青男) △富益新田▽

○カイニ アーナー。沢山あるねえ。(小男↓小男) △日野郡根雨町高尾▽

○ヨナゴノ アキンドワ カツキガ アーナー。米子の誰人は活気があるねえ。(老男↓私) △西原▽

○ハガシジャント オチサー、ワ。葉がひとりでに落ちるよ。(老男↓私) △夜見新田▽

○カワীগワー タイコ タタイテ ナー。交代で大鼓をたたいてねえ。(老男↓私) △岸本▽

○ダイガクニ アガイヤーナノガ アーカナ。大学に進学するような息子があるかね。(老女↓中女) △御来屋▽

以上の諸例は、/i-aru/の「i」が隠在して、「[i:]」となっているものである。

(2)、[o]につづく場合

○ウチノ ズサンワ イマ トットリニ イキチヨীগヤー。私の家のじいさんは今鳥取に行っているかねえ。(中男↓私) △夜見新田▽

○テツドリーニ ムスコガ デトーシナー。駅に息子が勤めにしているしねえ。(老男↓中男) △岡▽

○カネ ハヤトーコトイ オモイツカナ イケン ガナ。お金を早くもうけることを思いつかねばいけないよね。(老男↓青男) △下市▽

以上の諸例は、/oru/の「r」が隠在して、「[o:]」となっているものである。

(3)、[e]につづく場合

○ソゲシテ タベークアイノ モンダ。(楽しみと言えは) そうして食べるくらいものだ。(老男↓私) △富益新田▽

○ソゲシテ オキヤー ヒトリデニ カレーワ。そうして放っておけば自然に枯れるよ。(老女↓中女) △日野郡伯南町生山▽

○コノ イシガ デーノモ ナー。この石が出るのもねえ。(老男↓私) △所子▽

○マンダ ツトメラレーノオ ヤメテ ナー。まだ勤められるところを自分から退職してねえ。(老女↓私) △御来屋▽

○ヒトニ ヤツカイ カケイヤーニ ナルト デラレマシエンワイ。人に厄介をかけるようになると(旅にも)出られませぬ

よ。(老女↓私)△御来屋▽

以上の諸例は、 $1 \sim \text{eru}$ の /ru/ が隠在して、[e:] となつてゐるものである。出雲地方においては、/ru/ 音節が母音 [e:] に つづく場合には、一般に「 $\sim \text{ae}$ 」となるようであるが(注三)、当 地方においては、「e:」と実現する。

(4)、「r」につづく場合

○イマワ ナンナトカ|ンナト デキ| ナー。今はなんでもでき るねえ。(老男↓私)△夜見新田▽

○ウスワ ナンボデモ アキナイガ デキ|ダケ ナー。牛でな らいくらでも商売ができるからねえ。(老男↓中男)△別所▽

○ノビ|ワ。(疲れて)のびてしまふよ。(小男↓小男)△西 原▽

○スゲ アキ|ワ。すぐにあきるよ。(中女↓中女)△所子▽

以上の諸例は、 $1 \sim \text{iru}$ の /ru/ が隠在して「r」^{*}と実現して いるものである。

(5)、「r」につづく場合

○ナン スー|ダ。なにをするのか。(老男↓青男)△夜見新 田▽

○マタ ク|カモ シレマシ|ェンダドモ ナー。また行くかも知 れませんけどねえ。(老女↓私)△御来屋▽

「する」は [sɯ:]、「行く」は [kɯ:] と実現するのが、当該方 言の慣習である。出雲地方のように、「sa:」[kwa:] となること (注四)はない。以上の諸例は、 $1 \sim \text{uru}$ の /ru/ が隠在して

「r」^{*}と実現してゐるものである。この現象は、前述の「する」 「行く」の二語詞に、取約的にみとめられるようである。/ru/ 音

節の隠在現象は、その前接母音が「i」と「e」の場合に、もっと もふるわないと言えようか。

/ru/ 音節は、その前接母音が、[a:]、[o:]、[e:]、[i:]、[u:] のいずれであっても、隠在する可能性を有していると言えよう。

以上、ラ行音節が隠在している場合についてみてきた。ラ行音節の隠 在現象は、動詞、補助動詞、形容詞などに多くみとめられたのである が、名詞、代名詞などにも、いくらか、みとめられたのである。こ のように、ラ行音節が、意義の明確さを特に強く要求する名詞、代 名詞などにもみとめられるということは、この現象が、新しくおこつ たものではないことを、意味しているかに思われるのである。

ここで、ラ行音節の隠在現象がみとめられる場合を、その前接音 節の末尾母音との関係から整理して、左に図示してみよう。

前接母音 ラ行音節	/a/	/o/	/e/	/i/	/u/
/ra/	○				
/ro/		○			
/re/	○	○	△		
/ri/	○	○	○	○	○
/ru/	○	○	○	○	○

(上の表は、横の系列 に母音をその広いものか ら順に並べ、縦の系列に はラ行の各音節の末尾母 音に注目し、その広いも のから順に並べて作った 表である。表の中の○印 は、隠在現象がみとめら れることを示すものであ る。)

右の表から、ラ行音節 の隠在現象が、[a:]、[o:] の広母音につづく場合に多くみとめら れることが、まず、注目されよう。当該方言においては、/re/、

r — 2例 — 2例(四%)

この結果は、用例数が少ないということと、用例にいくらかのかたよりがみとめられるかもしれないということの二点で、はっきりとした数値とは言いがたい。しかし、おおよその傾向は、この数値から判断できよう。

まず、前接音節の頭子音が /n, ni, ni/, /b/, /d/, /d/, /n/ である場合が全体の67%をしめていることが注目されよう。破裂音について高率を示している摩擦音は、全体の16%をしめているにすぎない。破裂音との間に、大きなひらきがみとめられるのである。この傾向は、破裂音を含む音節が、ラ行音節に前接する場合には、ラ行音節の隔在現象がみとめられやすいことを、かなり明確に示しているとみられる。ラ行音節という弱い音節は、破裂音という強い音を含む音節の後では、なほどこか隔在しやすかったのではなからうか。

なお、ラ行音節の隔在現象とアクセントの相関関係、およびラ行音節の隔在現象とラ行音節の語、話部における位置との相関関係などについて検討してみたが、はっきりとした傾向は、みとめられないようである。

さて、ラ行の各音節の末尾母音が、前接する音節の末尾母音と同じか、あるいは狭い場合におこるラ行音節の隔在傾向は、かなり多くの事例にかなうのであるが、しかし又、次のような事実も、指摘することができるのである。即ち、「[o]音節が[a]につづく場合」[e]音節が[e]につづく場合には、「[ro]、[re]」の各音節の末尾母音は、それらの前接母音よりも、狭いかあるいは同じであるにもかかわらず、隔在現象が認められない。又、ラ行音節が /n/

に後接する場合「[re]音節」(「masu」→「mafen」)がつづく場合などにも、隔在現象はみとめられないのである。これらの事実をどう考えたらよいであろうか。以下、そのことについて、考察を進めていく。

二、ラ行音節が隔在している場合

(1)、ラ行音節が必ず隔在する場合

(1)、ラ行音節が /n/ に後接する場合

- [sanri] (三里)
- [dzinrikci] (人力車)
- [benri] (便利)
- [tenrikio:] (天理教)
- [kanri] (管理)
- [czikanre:ko:] (時間旅行)
- [senro] (線路)
- [enro] (線路)
- [keinro:] (型勢)
- [tenankai] (展覧会)

ラ行音節が /n/ に後接する場合には、ラ行音節は、必ず隔在する。例えば、「[sanri]、[senro]」に「つづく言葉」/sann/ /sen/)となることはなから。そして、/n+ラ行音節/の音節連続がみとめられる事例の多くは、名詞である。/n/ に後接するラ行音節が隔在する理由としては、次のようなことが考えられようか。

[sanri]、[senro]と「つた名詞が、仮に、/sann/、/sen/と実現されたならば、「三里」「線路」の意義は、おそらく理解で

きないであろう。ラ行音節の隠在現象が、いかほど盛んであるといつても、意義が理解できなくなるような事態は、できるだけ避けなければならないという反省が、無自覚的ではあるにもせよ、はたしてゐるのではないかと考えられる。

② [ra], [re] 音節に /N/ が後接する場合

- [wakaraN] (分らない)
 - [mawaraN] (廻らない)
 - [oboraren] (覚えられない)
 - [ekaren] (行つてはくれない)
 - [jomaren] (読んでほしくない)
 - [asparen] (遊んでほしくない)
- ラ行音節に /N/ が後接する場合でも、ラ行音節は、必ず顕在する。上に示した事例を見ると、全てが、*—raN*, *—reN* という打消、禁止の言いかたでおおまかである。ラ行音節が隠在しないという理由の一つは、おまかへの打消、禁止の言いかたにあるものと考えられる。

③ [re] 音節に [~masu, ~maSen] が後接する場合

- [noboremasu] (登れます)
- [agaremasu] (上れます)
- [naremasu] (成れます)
- [toremasu] (取れます)
- [kiremasu] (割れます)
- [noboremaSen] (登れません)
- [hagaremaSen] (入られません)
- [hajiraremaSen] (走られません)
- [re] 音節に [~masu, maSen] の言いかたが後接する場合でも、

[re] 音節は、必ず顕在する。顕在する理由としては、次のようなことが考えられよう。共通語などで、「アガリマス」「ノボリマス」と言うところを、当該方言では、普通、「aga:masu」, 「nobo:masu」と実現する。即ち、/ri/ 音節に、[masu, maSen] が後接する場合には、/ri/ 音節は、必ず顕在する。仮に、[re] 音節に、[~masu, maSen] が後接する場合にも、[re] 音節が顕在したならば、「アガリマス」と「アガレマス」、「ノボリマス」と「ノボレマス」との意義上の区別がつかなくなる。それゆえ、「上がりマス」「登ります」の言いかたのときには、「アガーマス」「ノボーマス」と実現し、「上がれます」「登れます」の言いかたのときには、「アガレマス」「ノボレマス」と実現するのである。

それでは何故、/ri/ 音節の場合に顕在し、[re] 音節の場合に顕在しているのであろうか。まず、/ri/ 音節にくらべて [re] 音節は、その末尾母音が広いために、隠在しにくいということ、次に、「アガーマス」「ノボーマス」が平叙表現であるのに対して、「アガレマス」「ノボレマス」が可能表現であるというところで、表現上のきわだたせ意識が作用していることの二つが考えられよう。ラ行音節の前接母音がラ行音節の母音よりも広いか同じであるにもかかわらずラ行音節が顕在している場合

④ [ri] 音節が [i] 母音に後接する場合

- [Siri] (尻)
- [erinoSi] (砂子)
- [taSiamaeri] (大壮参り)
- [kiri-i] (きり)
- [wamonoeri] (若者入り)

○ [Chaʃriɾidzikaɛ] (走り使い)
 ○ [ʃakʰiriɾi] (はつきり)
 ○ [koppiriɾi] (ちよつぱり)
 /ri/ 音節は /ra/ 音節とひとび、隠在現象のいふところの音節である。その [ri] 音節が、[i] 母音に後接する場合に限って、隠在現象がふるむるのである。

(3) ラ行音節の隠在現象がみとめられる場合でしかも顕在している事例

- ① [ra] 音節が [a] 母音に後接する場合
- [waraɳdzū] (わらじ)
 - [karakasa] (傘)
 - [ʃukara] (カ)
 - [aasina] (荒紗)
 - [hara] (原)
 - [ʃibaraku] (しばらく)
 - [sarani] (一向に)
 - [kwanaɾadzū] (必らず)
 - [ʃatarani] (やたらに)
 - [dokojara] (どこやら)
- /ra/ 音節が [a] 母音に後接する場合には、隠在現象がみとめられること、そして、それは、かなり特定の語詞に限られていることなどは、すでに述べた。[ra] 音節が [i] 母音に後接する場合には、[ra] 音節は、むしろ、顕在することの方が多いと言えよう。
- ② [ro] 音節が [o] 母音に後接する場合

- [tokoro] (所)
 - [tororo] (藪藪)
 - [kokorojaɛ] (心使い)
 - [otorokū] (轡く)
 - [tokorode] (さて)
 - [soroɾo] (そろそろ)
 - [orooro] (おろおろ)
- /ro/ 音節が [o] 母音に後接する場合には、/ro/ 音節の隠在現象がみとめられること、そして、それは、「今頃」「この頃」などの「頃」に、収約的に認められることなどについては、すでに触れた。[ro] 音節は、顕在することの方が多いと言えよう。

- ③ [ri] 音節が [a] 母音に後接する場合
- [titaru] (二人)
 - [kūsakariba] (草刈り場)
 - [agariko] (養のあがり子)
 - [jamagaru] (山狩り)
 - [tabetarū] (食べた)
- ④ [re] 音節が [a] 母音に後接する場合
- [Kareta] (枯れた)
 - [kareta] (借りた)
 - [nareta] (買れた)
 - [arare] (あられ)
- [re] 音節が [a] 母音に後接する場合にも、上のような事例においては、[re] 音節は必ず顕在する。「枯れた」「借りた」が、ともに、/kata/ と実現されたならば、「ka:ta」(買った)との間に、意義の上での衝突がおこることになる。「枯れた」「借りた」

が、ともに「kareta」¹と実現しているが、これらは、前後関係から、意義の区別は可能であろう。しかし、/kata/（借りた）と「ka:ta」（買った）とは、容易に区別ができない。又、「nareta」（慣れた）は、一方に「na:ta」（納った）があるから、「慣れた」が/nata/と実現すると、両者の間で、意義の上での衝突がおこることになる。したがって、すでに定立している買った「納った」との混乱を避けるために、「枯れた」「借りた」「慣れた」などの語詞における「re」音節を、意識的に顕在させているのではないかと思われる。

三、ラ行音節が二音節以上連続する場合にみとめられる隠在現象

丁、二音節の場合

- [jomare:]（読まれる）
 - [to:re:]（取れる）
 - [ɛ:kare:]（行かれる）
 - [kakarē:]（書かれる）
 - [ɕi:ware:]（叫ばれる）
 - [sare:]（される）
 - [atsimare:]（熱められる）
- ラ行音節が二音節にわたってつづく場合には、必ず、後の音節が隠在する。
- 戊、三音節の場合
- [homare:]（ほめられる）
 - [koerare:]（大られる）

- [hɔ:ɕirare:]（先される）
 - [tomerare:]（召められる）
 - [jorare:]（集められる）
 - [sawarare:]（睨められる）
 - [torare:]（取られる）
- ラ行音節が三音節にわたってつづく場合には、上に示したように、必ず、最後の音節が隠在する。

おわりに

以上で、「鳥取県伯耆西部方言におけるラ行音節の隠在現象」についての記述を終える。当該方言におけるラ行音節の隠在現象は、一見、単純なように見えるが、そのおこなわれさまを、いろいろ検討していった結果、相当に複雑であることが、理解できた。ラ行音節の隠在現象には、一定の傾向がみとめられるようであるが、なお、その傾向にしたがわない事例も、かなりみとめられたのである。それらの事例が、どのような理由で隠在現象の傾向にしたがわないかを、一々について考察した結果、隠在していない場合には、それなりの理由のなにはどか存することが、理解できたのである。

(注一) 藤原与一先生「裏日本地方のことばの発音」（「音声の研究」第七輯）

(注二) 鳥取県東伯郡羽合町一帯では、/r/の促音化・撥音化現象 /ri/ /re/ の促音化現象がいちじるしい。

(注三、四) 藤木敦氏「出雲方言における「r」音について」（「方言研究年報」第二巻）

(注五) この場合だけ、前接音節の末尾母音の方が狭い。

○当研究にあたっては、藤原先生をはじめ愛宕入郎康隆氏、佐藤虎男氏、山内洋一郎氏などからいろいろと御指導をたまわった。厚く御礼を申し上げる次第である。

(昭和三十八年十二月二十五日)

—— 広島大学大学院学生 ——

編集部注 [a:]は[a:]の音価を表示する。

[i] [u] [e] [o]の場合も、同様である。